

## 除草の風土〔12〕

### 新潟県中越地方の松代町・高柳町における「草刈り」と「草薙ぎ」

徐 錫元\*



第1図 山の中腹での草薙ぎ (松代町 2007年8月)

新潟県は南北に細長い県で、北から下越、中越、上越、そして島の佐渡の4地方からなる。平成18年度の新潟県の水稲作付け面積は、全国第1位の約12.0万haであり<sup>3)</sup>、そこで収穫されたコシヒカリ(水稲品種)は、新潟産コシヒカリとして高い人気を得ている。水田は新潟平野で代表される平坦地域のみならず、内陸部の中山間地にも多く、山間には多くの棚田も見られる。

中山間地の農業は雑草との戦いである。畑地、水田はもとより農道などは地形的に法面が大きく、農家の後継者不足と高齢化が進む中、その雑草防除は農家にとって大きな負担となっている。また、これらの除草の他に、山中での除草もある。山では食用のゼンマイ、ワラビ、フキなどもあり、このための除草も行われる。

一般的に、雑草を草刈り機や鎌で「刈る」ことを「草刈り」という。しかし、新潟県中越地方中山間地の、標高が150m～600mで東頸城丘陵の中にあ

る松代町(現十日町市松代町)や、その隣町の高柳町(現柏崎市高柳町)などでは、概ね自分の背丈よりも低い草を刈る場合には草を「薙ぐ」、そして、自分の背丈よりも高い草を刈る場合には草を「刈る」と言い、使い分けられている。また、草を「薙ぐ」ことを「草薙ぎ」と言う。辞典によると、「薙ぐ」<sup>1)</sup>は、横ざまに払って切る、また、倒すという意味である。

平成19年、夏の盛りのある日、松代町のまつだい駅の近くを流れる洪海(しぶみ)川を渡り、松代城山の入口付近の山間の農道を、左手に水田を、そして右手に山の斜面を見ながら歩いていると、農道から頂上まで20m程度の山の中腹斜面で、農家が腰をかかめながら、膝から腰ぐらいの高さになった雑草を薙いでいた(第1図)。平坦な所の草薙ぎであれば、動力の草刈り機を使用することができるが、このような勾配の強い所では、草刈り機は使用できず、鎌を用いた草薙ぎとならざるをえない。また、麓から斜面の草薙ぎを行う場合は、片手を斜面につき体を支えながら、もう片方の手に握った鎌で草を薙いでいた(第2図)。夏の山の斜面には、ミゾソバ、ススキ、クズ、セイタカアワダチソウ、ノブキ、タケニグサなどの大型の雑草が見られた。これらを薙ぐために、鎌は通常の畑の鎌よりも大型で刃も厚いが、刃は欠けることもある。食

\*バイエルクロップサイエンス株式会社  
(Bayer CropScience K.K.)

Seok Weon Seo: Meaning of mowing, "Kusakari" and "Kusanagi", at Matsudai and Takayanagi Towns of Chuetsu region in Niigata prefecture, Japan



第2図 山の麓での草薙ぎ（松代町 2007年8月）



第3図 夏の水田畦畔（松代町 2007年8月）

用となるゼンマイ、ワラビ、フキなどがある場合は、これらをよけながらの草薙ぎとなる。ふと、農道脇を見ると、薙いだ雑草が堆肥とするために野積みされ、一部はビニールシートで覆われていた。

一方、反対側の水田の方を見ると、畦畔が草刈り機によって除草されていた（第3図）。山口ら<sup>8)</sup>は畦畔を部位により「まえあぜ、あぜの平坦面、畦畔草地」に分け、著者<sup>4,5)</sup>はこれを参考に、「前あぜ、平坦面、後ろあぜ」と呼んでいる。この松代町や高柳町などでは、前あぜと平坦面を「あぜ」と呼び（後ろあぜの上部を含むという者もある）、後ろあぜは「くろ」と呼んでいる<sup>4,5)</sup>。当地では、草刈り機を使う今日でも、あぜの草を刈ることを「あぜ薙ぎ」、そしてくろの草を刈ることを「くろ薙ぎ」<sup>4,5)</sup>という。「くろ薙ぎ」、「くろを薙ぐ」「くろ薙ぎをする」、「くろ薙ぎをした」という言葉が、当地におけるくろの草刈りを表す言葉である。なお、高柳町門出では、あぜの草に対しては、あぜ薙ぎという表現の他に、「あぜ草取り」ともいう<sup>5)</sup>。これは、以前、畦畔の平坦面において、自家消費用味噌・醤油の原料となるダイズなどを栽培していたことと関連がある。農家によると、昭和45年頃までは、ほとんどのあぜにダイズが栽培されていたという。ダイズの播種は水稻移植後に行われ、その後の除草はそのあぜ豆を傷つけないように、注意深く鎌（小鎌）を用いて行われていた。このことから、あぜの除草には刈るのではなく、取ると表現されてきたものと考えられる。

当地では、草刈りは、前述したように、草薙ぎとは異なり、概ね自分の背丈よりも大きい草を刈ることである。農業が機械化される以前、農家では農耕用の牛馬が飼われていた。山などにはこの牛馬の飼料とする

ための草刈り場があり、そこで雑草を大きく生長させ刈り取っていた。刈り取った草は、まず、つなぎと呼ばれる藁ひもで束ね、藁で編んだ背中当てのばつとり（ばんどり）<sup>4,5)</sup>に背負って運び牛馬に与えていた。このことから、当地において、草を「刈る」と言う言葉には、草を「利用する」という意味合いがあったのではないかと感じられる。

「草薙ぎ」という言葉は、国語辞典<sup>7)</sup>などにも収録されているが、改定雑草学用語集<sup>2)</sup>には未だ収録されていない。これを機に、先の「草掻き」<sup>6)</sup>と同様、収録されることを提案したい。

#### 引用文献

- 1) 藤堂明保・松本 昭・竹田 晃・加納喜光 編集 2004. 改定新版 漢字源. 凸版印刷, 東京, pp. 629.
- 2) 日本雑草学会 1991. 改定雑草学用語集. 日本雑草学会, 東京, pp. 3-54.
- 3) 農林水産省統計情報部 2007. 平成18年度耕地および作付面積統計. 農林統計協会, 東京, pp. 41.
- 4) 徐 錫元 2000. 新潟県の水稲農家に学ぶ畦畔雑草防除. 関東雑草研究会 11(部分訂正稿). 15-24~6.
- 5) 徐 錫元 2002. 日本の水田畦畔管理について (3) 草取り, 草むしり, 草刈り, 草薙ぎ. 植調 35, 333-339.
- 6) 徐 錫元 2007. 愛知県渥美半島におけるキャベツ畑の雑草防除, とくに「草掻き」について. 雑草研究 52, 113-114.
- 7) 尚学図書編 1998. 国語大辞典. 尚学図書, 東京, pp. 724.
- 8) 山口裕文・梅本信也 1996. 水田畦畔の類型と畦畔植物の資源的意義. 雑草研究 41, 286-294.